

白金蔭

九月号



平成24年9月発行 第19号

白金葭月例句会案内

月例句会報(12/9/21 7名欠4名)

・十月十九日(金)12:00~15:00アビ스타(第四学習室)
兼題:稻架、体育の日。

・十一月十六日(金)12:00~15:00アビ스타(第四学習室)
兼題:初時雨、茶の花。十一月28日(水)銀座句会。
・十二月二十一日(金)12:00~15:00アビ스타(第三学習室)
兼題:ちやんちやん、極月

兼題の参考句 (十月十九日分 (稻架、体育の日))

立山の姿いよいよ稻架組めり

稻架跡や雀の耀歌ひとしきり

稻架かげに喧ん坊と二人遊びけり

眼裏に祖母住んでいる稻架櫻

掛稻のすぐそこにある湯呑かな

廃校の鉄棒に稻掛けてあり

単線の客少くて稻架日和

体育の日の固過ぎるジャムの蓋

体育の日の裏韻を開け放つ

体育の日彼の全部が煙草臭

老猫の部屋逃げ回る体育の日

体育の日やもの書いて戸を出でず

田口可明

清塚和風

富田木歩

山下邦子

波多野爽波

井澤秀峰

壁谷公江

三木基史

倉本岬

三池泉

正木節子

園田夢想花

スワンボート混み合つてゐる渡鴨
放列のカメラ圧し合ふ運動会
秋の蟻声かけ合はで獲物曳く
撫子の咲いて昭和を遠くせる
子規忌来る国に懶るなくなる

増田陽一

ひと知れぬ絶滅あらむ秋の汐

巻雲や揚羽の雌が寝れてをり

鈴虫の触覚うごく星月夜

撫子や遠くに見ゆる父祖の墓

私生活考ぐるギリギリス

鈴虫にとつて置くなり茄子のへた

増田悦子

飯田孝三

草ひばりの伴奏ありて宵寝かな

光成高志

鈴虫の声の闇より水の音

撫子や女世帯に日が暮れる

街道の神輿の渡御について行く
山車競演世はめちやくちやでござりまする

倉田紀子

撫子や山姥の名は鈴木金
源氏物語本

鈴虫の一夜を鳴いて死にけり

光みち

子規庵の真昼の縁に蚊遣香
子の遠く糸底洗ふ秋の水
日照雨して山車も神輿も秋暑かな
みのり田の上演習の飛行機とぶ
母の家毀しことやななかまど

嘉悦羊三

連れてきて鈴虫の夜を楽しめり
ミシン止み鈴虫だけの昼下り

灯下親し廊下の地図の前に立ち

食べ切れぬほどの収穫敬老日

撫子や崩れてをりぬ砂の崖

吉羽多美子

虚の網をこぼるる夜這星

南朝の空蝉すがる吉野杉

鳥渡る記憶の島の彼方より

湯上りの衿をゆるめて残る虫
豆腐屋の自転車止る木槿垣

青木啓泰

青信号子供神輿の稻穂垂れ

鈴虫やコツブそろえて客を待つ

ふらり」とに座つて見ている鮪雲
ネ。ペール(発)人ありて百日紅
天の川行つてみたが暗からう
うす埃地球儀拭けばペルシヤ湾

町会の神酒所も今年は場所を換え

獅子舞を迎へる我家も老人

月日合戻の雷旦に怨を閉じ

撫子を花の収鑑で調べたり

なぜ此処に五階の隅に鉢叩

昼は蝉夕は鈴虫波の音

秋彼岸タオルを首に墓洗ふ

草わけて鈴虫の音探す夜

杉浦弥栄子

小山陽也

選句結果（数は入選数）

放列のカメラ庄し合ふ運動会
和菓子屋は南の隅に鈴虫を
鈴虫の二夜を鳴いて死にかけり
撫子や地の罅癒えぬ埋立地
昼は蟬夕は鈴虫波の音
鈴虫の声の闇より水の音
草ひばりの伴奏ありて宵寝かな
灯下親し廊下の地図の前に立ち
巻雲や揚羽の雌が寝れでをり
撫子や女世帯に日が暮れる
鈴虫やコップそろえて客を待つ
鳥渡る記憶の島の彼方より
ひと知れぬ絶滅あらむ秋の汐
撫子や山姥の名は鈴木金
町会の神酒所も今年は場所を換え
ふらりに座つて見ている鰯雲
片田舎夏の電車は窓を開け
街道の神輿の渡御について行く
草わけて鈴虫の音を探す夜
日照雨して山車も神輿も秋暑かな
秋の蟻声かけ合はで獲物曳く
灯下親しどんづん時まる源氏物語本
秋彼岸タオルを首に墓洗ふ
獅子舞を迎て我が家も老人
みのり田の上演翁の飛機とべり
豆腐屋の自転車止る木槿垣

孝三	陽也	高志	羊三	弥栄子	多美子	多美子	多美子
陽一	陽一	高志	高志	高志	啓泰	啓泰	高志
高志	高志	陽也	陽也	羊三	羊三	羊三	陽也
弥栄子	弥栄子	高志	高志	高志	高志	高志	高志
多美子							

一句鑑賞

飯田孝三

陽一

天の川行つてみたいが暗かろう
スワンボート混み合つてゐる渡鴨
なぜ此處に五階の隅に鉦叩
鈴虫の指揮棒の振りに合はせをり
撫子を花の図鑑で調べたり
山車競演世はむちやくちやでござりまする

啓泰
孝三
羊三
高志
陽也

私生活考へてゐるキリギリス

陽一

キリギリスの「私生活」とは初耳、驚いた。ならば「公」
もある筈、聴衆の喝采を浴びる舞台がそれ。イソップ物
語を踏まえれば不唆に富む。キリギリスに何を重ねるの
だろう。時折、首を傾げる昆虫の仕草が彷彿する。西洋
のエスプリと伝統の諧謔が渾然、蓋しほろ苦さの一句で
ある。

ある俳句教室の先生が、知の俳句は止せと口を酸づば
くした。俳句は理を捏ねる器ならず、との謂いと受けと
つた。が、俳句の登口は、知の扉、写生の門を出、又、情の
径を辿るもある。登口が一つだけの山は知らない。初め
見えるのは、登山道際だけ、次第に景色が開け、峠を抜
け、頂上に到れば、十方一望できるのは、一緒。俳句も
同じ。澤木欣一は、いみじくも、俳句は知の文芸である

と言つてゐる。キリギリスの「私生活」のウイットに知の閃きの抜ける一瞬を見るのである。

鈴虫にとつて置くなり茄子のへた

まづ、目を惹くのは、「なり」の切れのよさ。茄子は云うまでもなく鈴虫の餌、すぐやるかと思ひきや「とつて置く」、鈴虫への愛情が籠る。句のふくらみが生まれる。

悦子

鈴虫は、王朝文芸のヒロインの愛玩物、片や茄子は、日常茶飯、食の副菜、世俗そのものだ。すなわち雅俗転換の妙。颯爽、切字「なり」の手柄である。それにしても、涼やかな鈴虫の音色・姿と、もつこりした茄子の格好はかけ離れている。滑稽。しかも「へた」はその首根つ。それが鈴虫の美声を育む。創造の神の悪戯だろうか。「ズズムシ：ナスノヘタ」の響きの対照がすべてを物語る風だ。中七の温かさが両者を繋ぐ。巧まぬ飄逸が秀逸。

とまれ、愛嬌たっぷりな茄子の「へた」が一句の宙を丸抱えする。その切口の面にきらり露が光る。

食べ切れぬほどの収穫敬老日

みち

いつ頃からか、「敬老の日」は「老人の日」。余の三百六十四日は、まさか老人は余分というわけではないだろうが。のけから「敬老日」だ。祝日は国民の祝意、敬意、願いを込めた祝祭だから。

さて、その「敬老日」、芋、薯、蔬菜、雑穀が山ほど穫れ

て食べきれないほどである。今や、母ちゃん農業ならぬ、爺ちゃん、ばあちゃん農業の世。老人力で日本の農業はもつ。市民農園また然り。まだまだ、ぱりぱりの現役でござる。降り注ぐ秋の日を仰ぎながら、今日は有難い老人の日日和だなあ、流れる赤とんぼの群を追う。

子の遠く糸底洗ふ秋の水

悦子

日常茶飯の些細に感じ、遠く住む子を思い、ふと、子育ての昔を振り返る。「糸底洗ふ」の具体的の手元を詠んだところがいい。また、「子の遠く」が手柄。「の」は一句の贍とこころがいい。また、「子の遠く」が手柄。「の」は一句の贍執着が先立つ。「の」は、遠くいる子に思いを馳せ、遙かに時空の隔たりを胸に擁く。“子はどこにいても、達者で日々を励んでいてくれゝばいゝ”。かくして、厨の水道水は、広々、秋の水に通うのである。「秋」は、しみじみ母情の述懐。

撫子や山姥の名は鈴木金

やまんば

高志

峠の小さな茶屋である。さあ一服。店先に撫子が咲いている。迎えた小母さんは、明るく、気さく、身のこなしがいい。挨拶のやりとりが聞こえるようだ。茶屋の標札の名は「鈴木金」、金偏と本金だ。とつさに、坂田の金時を思った。小母さんは店の主なのである。「ズズキキン」と

読んでも許して貰えるかな。屈託ない飄逸の一句である。え、身の上話など、話が弾んだかつて？それは分からぬ。

浅草にあん蜜秋の暑さかな

多美子

スカイツリーの客足は順調、お陰で浅草の人出も往時を思われる。何せ、埒もない真夏日の残暑だ。殊に仲見世の人混みときたら蒸風呂並み、ハアハア喘ぐ。仲見世裏の甘味処でまづは一息。ア・サ・ク・サ・ニ・ア・シ・ミ・ツ・ア・キ・ノ・ア・ツ・サ・カ・ナ」^a音を九つ畳む口誦は、まさに喘ぎあえぐ口吻そのもの。拭いても拭いても顔中噴き出る汗が目に染みる。

（出句一覽掲載順）

（平24・9・23）

私生活考へてゐるキリギリス

陽一

「私は秋のキリギリス」という詩がある。合同句集「湖畔吟」の斎藤嘉久先生の前文にある。掲句を読んで直ぐそれを思つた。私はその詩を、先生告別式の弔辞で読み上げた。暑い最中にキリギリスは盛んに鳴く。チヨン、ギースと。時には、チヨンを省略してギースと嗄れ声で鳴くこともある。イソップ物語では、夏の間、蟻は冬の間の食料を貯めるために働き続け、キリギリスは食べ物を探び、働かない。やがて冬が来て、キリギリスは食べ物を探索するが見つからず、蟻たちに頼んで、食べ物を分けてもらおうとするが、「夏には歌っていたんだから、冬には踊つ

たらどうだ？」と断られ、キリギリスは餓死する。キリギリスはバイオリンを弾くのが公の生活であつて、秋、冬の生活は私生活である。掲句のキリギリスは、やがて来れる私生活を考えてゐるのである。嘉久先生の「秋の」と断つてゐる題名も凄さがある。これは、陽一さんのような芸術家に共通する生活感ではなかろうか。

昼は蟬夕は鈴虫波の音

弥栄子

この句を選んで三日後の朝日俳壇の大串章選に、同工異曲の下の句が載つた。「蟬時雨夜は虫時雨山家かな」（大村森美）。山家暮しひかくやと思わせる。弥栄子さんの句は、波の音の聞こえる生活にあつて、昼は蟬が盛んに鳴くし、夕べになると鈴虫の鳴く音まで聞こえてくるという至福のひと時を詠つた。私は、「鈴虫の音の中夕餉かかる幸」という句をついての間作つた。掲句には「幸福という言葉はどうにもないが、作者の心中は、かかる幸ありと思つてゐるに違ひない。その感覚は、年とうてはじめて分るのであつて、年甲斐があるといつていい。

ハガキ句短見

（ハガキ句報第十九報）

爪先の影踏む舞や後の月

飯田孝三
敏子

ハガキ句十九報 (H. 18. 10. 11)

山門に朱の黒ずみし秋の風
胎内に習ひし形月夜眠る
月光に玉の鎧割る團子虫

しろがねの芒ふわりと父母の顔

黄落やラストシーンの中にある
日を受けて鳥籠気分そぞろ寒

水深に似たる孤独や石蕗の花

旧友の演能を観る。その時お会いした子息も
秋興や友仲国仕手となり
冬來たる修士論文がんばれよ
爪先の影踏む舞や後の月

川越臺多院
羅漢さま松ぼつくりをお手玉に
燈下親し眼鏡の羅漢さまありて

敏子 哲也 高志

妙子 孝三 三穂

を許さぬ発見である。この氣を表現する役割は、まづもつて、シテとみる。又、「後の月」がいい。望の月では、能の幽玄にそぐわぬ。野外能かもしれないが、それを超える抽象の月としたい。悠久の時空の象徴である。地に能舞の歩を運ぶ。その爪先と後の月のほかは、一切を棄象する。因みに、薪能とすると篝火が目にうるさい。

秋興や友仲国仕手となり

年來の友が能舞台「小督」のシテ源仲国を演じる。「小

督」は平家物語に取材、高倉天皇の勅使仲国が帝の寵を受ける小督局を、中宮徳子の権勢を憚る嵯峨野の隠れ家に探し当て、侍女のはからいで、漸く、宣旨を伝える物語である。見どころは、酒宴で局との別れを惜しむ仲国の凜然、典雅、憂愁の舞いの場面とか。視る作者は、友との出会い以来の歳月をふり返り、互いの恪勤、切磋の日々を思う。この演目のシテは、直面(ひためん、面をつけぬ素顔)である。それだけに、交友数十年の感慨は入だつただろう。その思いが結句「「を舞ふ」ならぬ「となり」に濃い。

冬來たる修士論文がんばれよ

高志

「爪先の影踏む」とは、よくも言いとめたものだ。能舞台に舞うその餘歩運びが見えてくる。一足ごとに、爪先に生まれる影を「影踏む」と捉えたあたり、鋭い。追随

やる気がしぶ。

羅漢さま松ぼっくりをお手玉に

敏子

(H. 18. 11. 16 飯田孝三)

燈火親し眼鏡の羅漢さまありて

〃

孝三

胎内に習ひし形月夜眠る

(H. 18. 11. 16 飯田孝三)

川越喜多院での吟。どちらも院境内の小春の情景が彷彿する。明るく、ほほ笑ましい。一句目、「眼鏡の羅漢」が面白い。「燈火親し」は、羅漢さまの勉学に勤しむ姿を思つたのだろう。歳時記の例句がつまらなく見えてくる。

水深に似たる孤独や石蕗の花

哲也

石蕗の花に水深の氣を見るあたり瞠る。ただ、句風の異いだろうが、「似たる孤独」を言いたくない。「や」は情が出すぎる。

日を受けて鳥籠氣分そぞろ寒

哲也

お便り広場 (到着順 敬称略)

竹籠にせよ、金網籠にせよ鳥籠はシーサル。日を受けたその感情を巧みに捉える。が、「そぞろ寒」は常識の域か。「氣分」は余分な気がする。

山門に朱の黒ずみし秋の風

妙子

きのう、「二案内の「鳴く虫」俳画・俳句の会に出ました。出席者は十数人。大方「フアーブル友の会」の方々のようでした。奥本先生、増田さんの「指導」で色紙、短冊に自作の句を書き、虫の絵を描くといった趣向のものでした。ワイン、和酒や数々おつまみをぶるまわれ、11時近くまで、お邪魔してしまい、楽しいひとときでした。(増田さんと小生以外の方々はその後も歓談される)こうでした。(ありがとうございました。)

「黒ずみし」の過去形が気になる。むしろ、「黒ずむ」か。「朱」の読み「あけ」を嫌つたのだろうか。

三穂

しづかがねの芒ふわりと父母の顔

黄落やラストシーンの中にゐる

リ

一句目、銀の穂叢から、老父母のを連想したのだろうか。「ふわり」は言わずもがな。二句目、黄落を浴び、映

像のラストシーンの人物の氣分。

月明の珠の鎧割る團子虫

團子虫鎧の下の肢の数

もろともに七度転ひの糞ころがし

声援の湧くすぐ並び糞ころがし

十字軍の裔の髭面闇魔蟋蟀

鷗外も漱石も聴きに蟲の館

銀やんま觀潮樓へ又返す

以上展示場でヴィデオを見、周辺を散策しての駄作です。右取り敢えず(報告まで) (H. 18. 10. 22 飯田孝三)

前略白金葭八月号拝受いたしました。表紙裏に私の愚作がカラーで大きく掲載されており、びっくりいたしました。表紙の白金葭の写真もカラーでないのに、私の絵に高価なプリントインクを浪費させていいまい恐縮です。以上とりいそぎ御礼申し上げます。草々

封きつて驚く俳誌廻署に入る

(H. 24. 8. 24 伊藤一艸人)

白金葭八月号拝受致しました。先月号凹里祭の句どれも見事で圧倒されました。光成さん電機大の千葉ユータウンへ行かれたようですね。建築の構造実験棟は産学協同で、日特建設の折、関係しました。勉強会と共にした石本事務所OBの立石さんが技研の構造部長と共に働きました。とにかく暑いですね。もうそろそろ涼しくな

つても・。益々の御健康と御活躍を祈ります。

(H. 24. 8. 26 小山陽也)

前略早速八月号の句集をお送りください、ありがとうございました。この冊子を読み少しだけ作者の気持ちが理解できればと思います。冊子の裏表紙の絵の写真はよく描けていて、参考にいたします。いい絵が描けたら写真を送ります。草々 (H. 24. 8. 27 尾崎昇)

残暑お見舞い申し上げます。昨夜、水戸の飛田伸夫氏より電話報告があり、光成高志氏の投句をいたしました。いうもので、無理を申して誠に申し訳なく思っております。ありがとうございます。水戸連スタッフも大変感謝しております。暑々散々もう少し。御自愛下さい。

敬具 8月29日午前(青木啓泰)

残暑お見舞い申し上げます。高田様より「白金葭」の句誌頂戴しました。心を込めて創られた御誌、私にまで送つて頂き嬉しくて暑さもふき飛ぶ思いです。幸子お姉様としばし句にまつわる話、光成さんの近況に花を咲かせました。本当にありがとうございました。頂きます。

退職後夫も短歌、句を詠むようになり投稿などして仲間も増え、出かけること、電話・と行動範囲も広がり毎日嬉々としているのを良かつたと眺めています。私もたまには血が騒ぎ詠んではみますが、もう一つ納得のいく

ものは出来ません。読む、鑑賞することは大好きで心に響く句には感動します。私は、このところ書(漢字、大文字)を少しやっています。福山市美展(毎年七月ひろしまの書展(九月に駅前の福屋にて開催)などに出品させてもらつたりしています。年を重ねると体力気力も相当ないと力ある字は書けなくて、楽しみもあるけど苦しい方が募っています。先の展覧会には夫の句、短歌を軸にして出品しましたが、奥が深くてこれで満足ということは一度もありません。どの世界もそういうものなのでしょうね。

「白金霞」銀白色にかがやく霞(あし)という意味あいでしようか?手賀沼辺りへ蓮見舟で吟行に行かれたのでしようか。皆さんの感性が輝いていて、情景が浮んできます。

青鸞の飛び立つ杭の少し揺れ

日に入るに少し間のあり赤のまま

細やかで心に残りました。丹精込めて創られているこの句詠、光成さんの温もり、優しさが伝わります。どうか存分にご活躍されますよう心より応援させて頂きます。皆様のご健康とご多幸をお祈り致します。末筆ながら奥様によろしくお伝え下さいませ。かし」

(H. 24. 8. 28 廣本幸恵)

追伸..

異端者の如く抗ひ星の飛ぶ (朝日俳壇24. 8. 27)
太陽を着ているやうな極暑かな(〃 24. 8. 20)

車椅子片陰拾ひつつ進む (中国俳壇24. 8. 27)
入院の義母の個室に月影がさやかに様子見る」とどく

二階より幼が笑顔で起き来れば我家に朝日が顔出す」とし
(中国歌壇24. 8. 16)
入院の義母の個室に月影がさやかに様子見る」とどく

二階より幼が笑顔で起き来れば我家に朝日が顔出す」とし
(中国短歌大会
以上 廣本貢)

野良猫の甘えることを知らずして呼べばまばたき一つで応ふ

(毎日庭に来る猫、私の未熟な一首です。廣本幸恵)
サイダーの泡立ちて消ゆ夏の月 (山頭火句 百合子書)

(H. 24. 8. 31 山本百合子)

暑中御見舞ではなく残暑とか、野分と書くのが正当でしようか。それにも猛暑がつづきます。根をあげています。お変わりありませんか。

(24. 9. 2 鬼澤貞治)

受贈誌 (九月号)

岩清水両掌に受けて頂けり (薦96号) 森下流子

つるべ井戸深きに緑映りゐる (〃)

栗拾ふ繩文人になりきつて (彩106号)

平野ひろし

掘り上げて伊那の土の香新牛蒡(〃)

〃

崖道に喘ぐ巡礼河鹿笛

(〃)

平山二郎

香聴く鼻先薔薇に触るるほど(〃)

河端不三子

抽き出しに一千円札沖縄忌(飛行雲 64号)

駿河岳水

スカイツリー立つ横町のかき氷(〃)

〃

なつかしの花も蕾も天目指す(野火 792号)

菅野孝夫

体脂肪率一〇・六〇夏が来る(〃)

池田啓二

てせんの花も蕾も天目指す(野火 792号)

山尾かづひろ

俳句評論纂

*薊薊96号に吾かく戦へり(その五)森下流子が載つた。駆逐艦檍に乗艦した著者は三百余名の乗組員とともに昭和十九年八月十七日舞鶴を出港、関門海峡から瀬戸内海に入り柱島沖の泊地に到着、十九年十月二十二日

〔捷一号作戦〕発令、小澤艦隊の一艦としてフリピン東方海上の囮役を果たす間に、ボルネオに待機の栗田艦が

レイテ湾の敵艦隊に突入する作戦があつたが、十月二十五日夜明けと共に敵航空隊の襲撃が始まり、薄暮に至るまで続く。瑞鶴以下の空母全部と巡洋艦一駆逐艦二を失つた。著者の駆逐艦檍は瑞鶴の護衛に当つていたが、秋月が轟沈、次いで瑞鶴が沈んだ。檍は直ちに瑞鶴乗組員の救助に当つたが、その間敵機の爆弾三発の直撃を受

けて大破。甲板上は死屍累々、肢の踏み場もない惨状だつた。戦線を離脱して、蹠蹠として帰路に着く。海面の浮遊物に縋り漂う乗組員に「頑張れよー」と声を掛けて6ノットの低速で、沖縄経由岡山県の玉島造船所に着いた。ここに至るまで著者は、太刀風の乗組員として、昭和十九年一月十八日の米軍のトラック空襲に遭遇され、艦長以下百七十余名が艦と運命を共にされた。著者は二十時間も海に漂つていたところを救助された。救助の艦はラバウルに向う艦であったので、トラック島に降ろしてもらい、その島の司令部にて経理学校の入試の難関を突破して内地に戻つて、築地にあつた海軍経理学校に入校、猛勉強の後、海軍丘学校へ配属され、事務室での勤務をて艦船の転勤を懇願しての乗艦だったのだ。

*彩104号展望 白金葭同人 飯田孝三 が同誌106号に掲載された。二十四句を丁寧に鑑賞されて居られる。孝三さんの幅広い蘊蓄が自ずと鑑賞文に披露されてあり、作者への温かい励ましが感じられる。余勢があつて添削意見まで書かれてあるので、どうか心を平らにして、参考にされたいと思つております。

*「銀鏡神楽」一日向山地の生活誌——濱砂武昭著をしろみかぐらろみそらさんが私に届けられ頂いた。昨年夏に銀鏡神

樂が國立劇場に來ると云うので、そらさんから案内を貰い観劇した。そらさんのお父様が舞われ、また挨拶に立たれた。その時は失礼ましたが、今回頂いた本は、B5版硬表紙の写真入りで編集されており、先に見た神樂の詳細が解説されている。その他に、狩りのこと、日々の暮しむかし今、伝承を守り生活を刻むの六章立て、山峡の暮しが記述されている民俗学上も貴重な資料と思われる。よく読んで一度訪ねて行つてみたいところだ。広島山地は備後神樂で有名である。四谷の須賀神社に来た時見た事がある。毛利家発祥の地、吉田町では毎週どこかで神樂を奉納しているとか。高千穂の夜神樂は、天狼でよく詠われた。民俗学的な行事を追つてみると、いくら年月があつても足りなくなるが、考えてみると俳句の裾野は富士山の裾より広く大きいものだなあと今更のようと思つ。左に國立劇場の観劇神樂俳句を書いてそらさんへの御礼とします。しろみそらさんの漢字書きは、銀鏡空と聞いております。

動き無限劇場神楽梅雨の坂

高志

神の手の白し宿神三宝荒神舞

“

*現代俳句九月号に「ティータイム」というエッセイ小欄がある。「」に、増田陽一さんが「ファーブル昆虫記」と俳句のことという小文を書かれている。同書は奥本大三郎

訳もあり、その8巻の上にコハナバチの記述がある。この蜂は小さいモグラ塚が密集したような巣をつくる。それに「室の八嶋」の大神神社境内で出会つた驚きが念頭に残り、月面の噴火口より羽蟻たつ 陽一 という句が出来、佐藤鬼房選になつたことが書かれてある。私は山田吉彦・林達夫訳本を持つてるので、調べて見ると、同書8の中ほどに、ひめはなばちの生態が119—179頁に亘つて詳しく書かれてある。陽一さんの句は、ひめはなばちが蜜採集に飛び立つ様を詠んでいる。この蜂は処女生殖をするという。雌雄の協力からは雌しか生まれない。処女生殖から雌と雄が生まれる。この理由は誰にも説明できないと云つ。

エッセイ

日本と台湾

海外旅行先で(1)

飯田孝三

先年、チヨの首都プラハでのこと、中国人と思われる旅行者の一団で賑わうホテルのレストランで、偶々、朝食を相席した夫婦が話しかけてきた、「日本の方ですか」「ええ、東京から來ました」。「私どもは台湾人です、東京には行つたことがあります」、「そうですか、その他に

も?」。「ええ、京都、奈良、仙台、つくばなどに」。「それは?」「日本はずいぶん進んでいます」、「いいえ、いろいろ難題を抱えていまして」。「台湾はまつともつとよく

しないと」。暫く歓談の後、「ハブ ア ゲド トリップ」、

「サンキュウ ウイ ホウプ ユー トゥー」。これからヨーロッパ各地を廻るという。ごく軽装の夫妻は明るい笑顔

をのこして出て行かれた。

こちらは、最近の海外旅行先、四五日前に台湾旅行から帰ったばかりで参加したという、婦人の話。「泊つたホテルのロビーで、夕食後歓談していたら、台湾の年配のご婦人が号令をかけたの、日本語で、起立！そしてキュウジョウナントカって、日本の方向を指して、敬礼！ですって」、「最敬礼だろ?」、「そうそう」。「そういう」と今もあるの。「そうよ、そして『海ゆかば』を歌い出し、みんなに歌えて言うじゃない、旅行客にも同席の台湾の人にも。台湾の方よく知つてんのねえ、私なんか初めしか知らなかつた。それからが大変よ、『荒城の月』、『夷と兵隊』、『愛馬行進曲』と軍歌、唱歌が次々、私より齡寄りは一緒に盛り上がりつたけど、聞いたことがあるだけで、ちつとも歌えやしない」。婦人は団塊の世代である。こんな一幕は、日本人観光客歓迎の演出とばかり言えないだろう。台湾以外の旧同胞国之地ではあり得ないことだ。日

本が造つた建物は残らず取り壊されるくらいだから。

(H. 24. 5. 30)

芭蕉のかるみ以後 (19)

光成高志

宗房」と芭蕉が「貝おほひ」を携えて江戸へ下つた寛文十二年(一六七二)頃の江戸とはどういう町であったか、どういう時代であったか。町数の多いとえで江戸八百八町といわれるから、これで大凡の推測がつく。人口百万の世界一の大都市になつてゐた。その半分50万人は武士及びその家族、従属者で、ほとんどが消費者であつた。農村で徴収された租税の半分近くは江戸で消費されてゐた。江戸は貨幣経済の浸透とともに繁栄をかさねてゐた。江戸の町は、江戸城を中心にして、現在の山手線までの半径でぐるり円を描いた範囲が、御府内と言われる町奉行所の支配地であつた。円を六等分して、その東南の一画は佃島、石川島などの浮ぶ江戸湾に当る。当時の江戸の繁栄と江戸町の大名氣を井原西鶴は「世間胸算用」に次のように活写している。

天下泰平、國土安穩の御代であるから、万人ことごとく江戸商いを心がけ、それぞれの支店を出し、諸国から運ぶ商品は、船荷もあれば、陸路の馬荷で、毎日数万

駄も問屋に到着する。この盛況をみると、この世の中は金銀がたくさんあるのに、これを儲ける商才のないのは、商人として生まれて来て、まことにくやしいことだ。さるほどに、十一月二十五日より通り町のはんじやう、世に宝の市とは爰の事なるべし。常のうりもの棚は捨置て、正月のけしき、京羽子板、玉ぶりぶり細工に金銀をちりばめ、はま弓一挺を小判一両などにも買人有けるは、諸大名の子息にかぎらず、町人までも方に大氣なるゆぞかし。町すじに中棚を出して、商ひにいとまなく、錢は水のごとくながれ、白かねは雪のごとし。富士の山かげゆたかに、日本橋の人足、百千万の車のどろくに聞なしたり。(以下略)

西鶴と芭蕉は、同じ時代を生きて死んだ人であった。大阪で俳諧点者として出発したけれども、矢数俳諧といふ俳諧の邪道に陥り、散文への道に入り、『好色一代男』刊行によつて浮世繪草子作家に転じた。引用した世間胸算用が刊行されたのは、芭蕉没年の前年のことであつた。白石の『折りたく柴の記』もそうであるが、芭蕉の生きた近世、特に元禄時代の時代風潮をよく知らせてくれる文献である。芭蕉の仕えていた藤堂良忠(俳号蟬吟)が亡くなつた寛文六年から『貝おほひ』を執筆して江戸にする寛文十二年までの六年間が年譜上の不明になつてゐる。

この間は、後の幻住庵記(元禄三年)に「つらつら年月の移り來し拙き身の科をおもふに、ある時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは佛籬祖室の扉に入らんとせしも云々」と書いてゐる。この時の芭蕉をよく想像してみるとが、軽みの出発点を探る意味で重要と思う。これより十五年前の明暦二年には江戸に大火があり、江戸の様相が一変していた。奢侈に流れた世情に対する天罰と思ふ人々もあつた。政治的な戦国時代は終つており、その時代の大名は皆代わつてゐたが、文化の面では遅れて、漸く江戸は、沸騰する如く戦国時代の様相を呈していた。

我孫子日記

8／15例会。8／19*トライアスロン応援。8／24 2*母さんコーラス。8／26 3*エレクトーン発表会。9／7銀座。9／12 SOA。9／14 4*萱吟行会。9／16、17 5*布佐の秋祭。9／19 SOA。9／20 6*久寺家中。

9／21例会。

* 秋狂暑トライアスロン皆啼ぐ

2* 故郷の檜の木伐られ寂しけれ

銀座裏通りはサンバ夏祭

工事場の柵に実垂るゝ山牛蒡

巻きあげて飾りとなりぬ秋簾

高志
みち
昊司

連雀町に二つの稻荷秋めきぬ

秋祭大鯛稻荷を掛持ちす

良子 高志

5*

捧げされ御神輿山車をみそなはす

6* 秋祭神輿警衛夜もすがら
薙刀は身に密着す秋彼岸

三方に切り込む居合ひ秋彼岸

みち

原稿募集

句会報の中から一句一句選び鑑賞文を発行所まで、ハガキかメールにてお届けください。俳句特別作品は十句、評論、エッセイなど、又は季語に纏わる生活逸事などを書いてお寄せ下さい。当分十六頁中綴し製本型で編集します。多ければストックして順次掲載します。

編集後記

今月は、故郷の廣本幸恵さんの消息の中に「主人の俳句短歌」自身の短歌を頂いたので紹介しました。お訊ねの「白金霞」は、パンパスグラスの和名です。万葉集卷一、四五に旗薄が出ております。旗薄←旗芒←旗霞←旗白金霞というふうに考え、俳人の旗に相応しいと思っての命名です。葭の会を引継いだこともその志に含まれております。

誓子俳句翻訳 (5) Seishi Yamaguchi(1993)より転載

満月の紅き球体出で來たる

Full moon arriving
already taking the shape
of a scarlet sphere

Composed 1961.

The full moon has arrived; its color is red; it is also a perfectly round celestial sphere. A full moon, barely into the sky as a scarlet sphere.

写真は白金霞